

知識と技術と実践で

若狭の農を支えた 伊藤正作



伊藤正作肖像
(伊藤宗兵衛家蔵)

「はたらくのものにもむだほねおるぞ苗のそたての徳しらにや」など農耕のいろはを歌に詠んだ「耕作いろは歌」。これは若狭の農の発展に寄与した伊藤正作によるものです。

正作（本名信前）は、安永8（1779）年4月7日、三方郡河原市村（現在の三方郡美浜町河原市）の伊藤宗兵衛家の嫡男として生を受けました。伊藤家は、曾祖父信利の時代から、医者いしよと農業を家業としていました。父信安は家業の他、河原市村の庄屋を務め、和歌・俳句に優れた歌人でもありました。こう

した環境下で育った正作は、寛政12（1800）年に46才で急逝した父の跡を継ぎ、数え年26才で河原市村の庄屋となります。当時の河原市村は、戸数40戸ぐらい、田畑634石（約1600俵）余りで、小浜藩の中で大きい村でした。

正作は、『農業全書』など当時刊行の農業書のことごとく読破・研究し、広く藩外の農業実践家を尋ね歩いて見聞します。そうして得た農業技術をもとに、自らの実践と重ね合わせて実証し、若狭地方の気候風土に合うように手法を考案、普及に努

めたのです。

正作の手がけた農業技術改良のつに、稲の作付けがあります。正作が生まれた頃の稲の作付けは、中稲なかくて、晩稲おくてが中心で、天候不順等による大打撃を受けていました。しかし、河原市村では、正作が実践実証した早稲わせの作付けに重点を移し、裏作に麦や換金作物である菜種などの雑穀類を作付けするようにし、飢饉を乗り越えたのです。

小浜藩主は、こうした実践家としての正作の働きに注目し、各村々の農業指導を要請。正作はその功により、文化6（1809）年に、侍と同様に帯刀の特権を付与されましたが、それを固辞返上し一百姓として村人とともに過ごすことを選んだと伝わっています。

天保10（1839）年、正作はこれまでの実践実証をもとにした『農業蒙訓』を出版します。また、これ



『農業蒙訓』（伊藤宗兵衛家蔵）

に先立ち、天保8（1837）年には、父親習いの和歌や俳句の形式を模して、『一粒萬倍耕作早指南種稽歌』と『耕作いろはうた』を編み出します。ここには、当時の飢饉を乗り越えた様子が綴られています。彼はその生涯を農業の発展のために捧げ、元治元（1864）年86才で逝去しました。

関連史料・ゆかりの地

『耕作いろは歌』と 小浜藩から賜った紋付



『耕作いろは歌』（野崎左衛門家蔵）



小浜藩から賜った紋付
(伊藤宗兵衛家蔵)

『耕作いろは歌』は都々逸形式からなり、方言を織り交ぜながら「いろは48文字」の歌い出しで、農民にわかりやすく語りかけている農業書です。また、伊藤正作は小浜藩から功績を認められ、帯刀の特権を与えられましたが、「農業に刀はいらぬ。」と固辞し、その時に「紋付・袴・脇差」を賜りました。